

# 保育内容指導法「環境」の授業における 実践的取り組み

山路 千華<sup>1</sup>

## 1. はじめに

教育基本法第11条（幼児期の教育）において、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。」とある。更に、学校教育法第22条（幼稚園の目的）には「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その身心の発達を助長することを目的とする。」と規定されている。それらを根拠法令とし制定されている幼稚園教育要領の冒頭、第1章総則第1 幼稚園教育の基本に「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」と記されている。

上述したように、重要且つ基本的な幼児教育の考え方を示すこれらの法令等の中で、「環境」の文言はかなり多く用いられている。つまり、保育者養成校で学ぶ学生にとっては「環境」という言葉の理解から学びが始ま

---

<sup>1</sup>白鷗大学教育学部

<sup>1</sup>E-mail : yamaji@fc.hakuoh.ac.jp

ると言っても過言ではないのである。近年、地球環境を考える教育的な取り組みとして、文部科学省でも環境のための地球学習及び観測プログラム（GLOBE）への参加のための交換公文が締結されるなど、環境教育にも力を入れている。しかしながら、そこで用いられる「環境」という言葉の意味と、保育で用いられる「環境」という言葉の意味とは若干用いられ方に違いがあることに学生は保育の学びを通して気が付いていく姿が見られる。本稿で取り扱う「保育内容指導法（環境）」の授業の最終回でのリアクションペーパーには、多くの学生が「環境というと自然ばかりを思い浮かべるが、それだけではないことが理解できた」「保育において考えなければならない「環境」の広さに驚いた」などの、自身の「環境」についての概念の変化について記述している。

筆者は、「保育内容指導法（環境）」の授業において、その「環境」への理解を体感的に行うこと、また、「環境を通した保育」の具体的な指導計画立案の能力を個人レベルでも向上させるための手立てとして、「環境」を教材化するための実践的取り組みを行った。本稿ではその取り組みの内容をまとめることとする。

## 2. 領域「環境」の理解

### — 「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」を中心として —

保育の基本として、環境を通して行う教育について理解を深めなければならない。幼稚園等の保育の現場において、子どもの発達を支える「適当な環境」の設定や構成については、園で働く教職員、主に担任の学級運営として任せられている部分が多い。汐見（2014）は、関わる保育者の好みや経験によって構成される環境について、保育者が無意識に抱いている保育目標や子ども像などが形象化、具象化したものであるというが、それは、勤めた園にあらかじめ用意された園環境の中で小さな変革を加えたに過ぎないと指摘する。そのため、保育者の中には「環境を変えると保育が大きく変化することを実感しない」場面も多いことから、与えられている

園環境と保育展開、その保育の向こうにねらう子どもの姿や保育内容に、保育者はもっと意識的、積極的に環境構成の意味と役割を見出す必要があるだろう。そのような観点から、近年では保育者の指導力の一部としてある環境構成の事例研究の他、園環境そのものに目を向けた園舎づくり、園庭づくりに力を入れる園も多くなってきた。

仙田（2009）は、子どもの遊び空間の減少や、ともすれば子どもの遊び場や幼稚園等の保育施設が社会の中で迷惑施設のレッテルを貼られてしまう現状について危機感を持つとともに提言と今後の課題として「遊環構造」を提唱している。遊環構造は「循環機能があること」「その循環（道）が安全で変化に富んでいること」「その中にシンボル性の高い空間、場があること」「その循環に“めまい”を体験できる部分があること」「近道（ショートカット）ができること」「循環に広場が取り付いていること」「全体がポアラス（多孔質）な空間で構成されていること」の7つの条件を持つものとしている。

このように空間が工夫された保育施設も増えている一方で、変わらない「与えられた環境」のままの保育施設も多い。建築的な構造がどう変わろうとも、園施設としての空間的な環境をどのように子どもたちの園生活に生かすかという保育内容上の課題は、依然、現場の保育者の意識の持ち方と、知識に裏付けされた実践力とにかかっていることは紛れもない事実である。そこで、「環境を通して行う保育」の意味で使用される「環境」から、保育内容としての領域の一つである「環境」に視点を移し、「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」から保育指導法としての学びの内容を確認していく。

## 1) 幼稚園教育要領より

幼稚園教育要領には、第2章「ねらい及び内容」の中で、環境について以下のように示されている。

幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容

## 環境

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

### 1 ねらい

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

### 2 内容

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもち接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (6) 身近な物を大切にする。
- (7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- (10) 生活に関係の深い情報や施設などに関心をもつ。
- (11) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

### 3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい自ら考えようとする気持ちが育つようにすること。
- (2) 幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。
- (3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。
- (4) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

## 2) 保育所保育指針より

保育所保育指針には、第3章「保育の内容」の中で、環境について以下のように示されている。

保育所保育指針

第3章 保育の内容 (1) 保育のねらい及び内容

(2) 教育に関わるねらい及び内容

ウ 環境

周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、それらを生活に

取り入れていこうとする力を養う。

(ア) ねらい

- ① 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。
- ② 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- ③ 身近な事物を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

(イ) 内容

- ① 安心できる人的及び物的環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。
- ② 好きな玩具や遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ。
- ③ 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- ④ 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。
- ⑤ 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- ⑥ 自然などの身近な事象に関心を持ち、遊びや生活に取り入れようとする。
- ⑦ 身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く。
- ⑧ 身近な物を大切にする。
- ⑨ 身近な物や遊具に興味を持って関わり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- ⑩ 日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ。
- ⑪ 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心を持つ。
- ⑫ 近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する。

### 3) 「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」との比較及び差異の解釈

ねらいについては大きな差異は見られない。授業において解説した点としては、ねらいの3項目すべてが「身近な」という言葉で始まっている点である。子どもにとって「身近」なところ、つまり子ども自身が自分との関わりが感じられ分かりやすい部分から体感していくことが重要となる。更に、保育者は何が身近なのか、という子どもと周囲を正確に把握する力が必要となる。

内容については若干の差異が見られる。

保育所保育指針の内容の①「安心できる人的及び物的環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。」②「好きな玩具や遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ。」の項目は、幼稚園教育要領には見られない。幼稚園に比べ、幅広い年齢の子ども達が在籍することや、園で長時間過ごす子どもが多い等の保育所の特徴を鑑みると、園での「居場所」をどのように作っていくのかという観点で、安心できる環境への言及や物との関わり方への視点が必要であるためと考えることができるだろう。

幼稚園教育要領の(1)と保育所保育指針の③以下は、幼稚園教育要領(9)と保育所保育指針⑩まで、ほとんど差異は見られない。幼稚園教育要領(5)「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」と保育所保育指針⑦「身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く。」は、より生活に密着する保育所での生活において、「食」という養護的側面への記述として、保育所保育指針の内容が具体的である。幼稚園教育要領(10)「生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。」と保育所保育指針⑫「近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する。」は、若干の差異があるが、幼稚園、保育所それぞれの社会的な役割の差異から考えられる言葉の使い方によるものと思われる。いずれにしても、子ども達から見た世界を少し広げ、園

が社会とどのように関係を築いているのかという部分で、園の取り組み方が問われるところである。幼稚園教育要領(11)「幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。」の項目は、保育所保育指針には見られない。

幼稚園教育要領と保育所保育指針において、それぞれの社会的な立場の違いや、所轄省庁や根拠法令の基礎的理解の部分の差異から、同じねらいを達成するにしても、その内容の遂行には少しずつ違った視点が表れていることがわかる。

本稿で取り上げる授業「保育内容指導法（環境）」においては、第3章で取り上げるように「環境から素材を見つけ教材化する」ところまでを目標とするため、それぞれの内容の差異については理解する必要がある。

### 3. 授業「保育内容指導法（環境）」の概要

以下に、授業「保育内容指導法（環境）」について、シラバスに掲載した目的・ねらいと内容について抜粋して記述する。

#### 1) 目的・ねらい

保育内容「環境」は5領域のひとつであり、幼稚園教諭、保育士を育成するために必要とされている必須科目である。

#### 2) 到達目標

- 領域「環境」に関する知識を習得する。
- 様々な素材を保育教材化する方法を身につけ、保育における環境と子どもとのかかわりについて理解する。

#### 3) 内容

保育内容の領域の一つである「環境」のねらい及び内容を踏まえ、環境の特性を明らかにする。子どもが身近な環境とかわることによってどのような力が育つのかを考え、そのための保育者の援助の在り方について学ぶ。(全15回の授業内容詳細は省略)

## 4. 実践的取り組みの概要

第3章のシラバス記載事項2) 到達目標にあるように、本授業を通して「保育における環境と子どもとの関わり」を理解するために、様々な素材を保育教材化する方法を身につけなければならない。そのためには、保育の中で、身近な環境がどのように活用されているかを知る必要がある。学生にとって「身近な環境」であるキャンパス周辺において、模擬的に保育実践を行うことで、保育の中の環境との関わりを体感し学ぶ実践的取り組みを考えた。

### 1) 学習内容の段階

シラバス掲載の具体的な学習内容として、「環境に関わる力（人・物・自然）」「数量・図形・文字との関わり」「安全に配慮した園庭・園環境づくり」「安全に配慮した園外保育」「身近な小動物・植物への関わり」「人的環境としての保育者の役割」「環境の理解と実践力」などがあげられる。

そこで、実践的取り組みとして、クラスを6つのグループに分け、保育での環境との関わりを想定した模擬的保育実践の課題を課した。授業第1回から第4回までに、保育場面における環境を構成する4つのカテゴリー（物質的環境、社会的環境、自然環境、情報環境）が、人的環境である保育者や子ども自身を取り巻く他者とどのように関わりながら展開されているのかを具体的に学んだ。その学びを第5回と第6回で実践的にキャンパスから近隣の城山公園までの間で課題を遂行した。第7回では、その実践的取り組みから学んだことを発表するための準備を行い、第8回においてプレゼンテーションとして発表した。第9回以降はグループでの実践的取り組みを通して学んだ実践を個人レベルで行うことができるようになるため、環境素材の教材化の方法を学び、実際に保育計画としていく手立てを学ぶよう授業の構成を行った。以下に実践的取り組みの詳細について記述する。

## 2) 実践概要

①日時：第5回（5月16日・17日）

第6回（5月23日・24日）

\*本授業が2クラスに分かれている。月曜日の授業のクラスと火曜日の授業のクラスがあるため、日程が2日になっているが、学生は週に1コマの授業である。

②内容：以下のようにそれぞれの環境との関わりにおいて保育場面を設定し課題を課した。

○物質的環境との関わりを中心に

- グループ1への課題：城山公園の遊具について、楽しい遊び方や集団ゲームへの活用方法、危険回避のポイントなど3歳児20名の子どもが一度に遊ぶことを想定し、徹底検証してください！

○社会的環境との関わりを中心に

- グループ2への課題：3歳児集団20名がこの教室から城山公園まで歩いて行くための遠足ルートを決定してください！危険ポイントを明確にし、その回避または軽減方法を考慮すること。

○自然環境との関わりを中心に

- グループ3への課題：学校から城山公園までの植物マップを作成してください！ルートや、マッピングのエリアは自由ですが、4歳児が保育中のお散歩でできる範囲を想定、設定してください。
- グループ4への課題：学校から城山公園までの動物マップを作成してください！ルートや、マッピングのエリアは自由ですが、4歳児が保育中のお散歩でできる範囲を想定、設定してください。

○情報環境との関わりを中心に

- グループ5への課題：町にある標識や案内看板を集め、その意味や情報伝達の実態についてリサーチしてください。その上で、5歳児を対象に標識や看板を使用したゲームを考えてみましょう！
- グループ6への課題：学校周辺の様々な音を収集し、音マップを作成し

てください。ルートやエリアは自由です。その上で、5歳児を対象に集めた音を利用したゲームを考えてみましょう！

- ③実践の様子:いずれのグループも授業90分の間での取り組みとなるため、城山公園への往復時間等を考慮すると、実際に観察したり写真撮影をしたりするには時間が足りない様子であった。また、校外に出かける日程は決められていたため、その日の天気によって観察した場面が異なったり、やろうとすることが制限されたりして苦労している姿が見られたが、それも「環境との関わり」という観点で考えれば有り得ることだと割りきって工夫して実践に取り組んでいた。また、校外へ出かけるのは2回であったが、1回目はほぼ全てのグループが(学生としての)自分たちのペースで実践を進めていた。そのため、1回目の授業終わりの時間で、次回の実践においては視点を変えて、それぞれ課題遂行の対象年齢の子どもの姿を想定して歩いてみることを勧めた。子どもたちの歩くペースは当然、大人の歩くペースよりは落ちるということ、更に、年齢によって子どもたちの集中力の持続時間が違うことなどを考慮することで、同じルートを歩くにも目的地へ到達する時間に差が出るはずだからである。子どもの立場に自分を置いて子どもが見る世界を意識してのシミュレーションによって、子どもが目を留めそうな事象、寄り道をしそうな場所などに気付くことで、保育内容に少なからず違いが出るということを体感することができたのではないかと感じている。



写真1：実践の様子①植物の枝葉を観察



写真2：実践の様子②階段の上り方を工夫

## 5. 実践的取り組みの効果

4-2)に報告した実践を、それぞれのグループでまとめ、第8回(6月13日、14日)で発表している。前回の第7回(5月30日、31日)で、発表資料の準備等を進め、課外時間にもグループで集まって作業や練習をしたグループも多かったようである。

以下に、プレゼンテーションの結果について報告する。

### 1) プレゼンテーションの内容

#### 【Aクラス(実施日6月13日)】

##### ①グループ1:3歳児20名対象

課題:城山公園の遊具について、楽しい遊び方や集団ゲームへの活用方法  
発表タイトル「城山公園で遊ぼう」

発表の形式及び作成:ポスター(模造紙3枚)と口頭発表

##### ○遊具の紹介と留意点、安全に遊ぶための手立て

「シーソー」木のささくれがないか?傾いた際の安定性はあるか?を確認する必要がある。

「滑り台」高さがあるため飛び降りない、滑る順番を守る、逆走させない等をルールとする。

「砂場」動物による砂の汚染がないか?公園利用者のごみ(たばこの吸い殻など)があるため、砂のついた手で目をこすったり、口に入れたりしないことを徹底する→遊ぶ前の準備

「ブランコ」揺れる範囲に待っている友達を入れない→柵の点検をし、順番を守る。

「グローブジャングル」遠心力で高速で回るため、子どもが跳ね飛ばされる、指を入れてしまい切断される等の事故多発したため、多くの場所で使用禁止かまたは撤去する方向で動いている。→絶滅危惧遊具とも言われている。(城山公園でも使用禁止となっている)

「ジャングルジム」急いで上がらない、物を持ったまま上がらない、飛び降りない、を絶対のルールとする→鉄の老朽化に注意することと、指を

挟まないようゆるみがないかチェック。

○グローブジャングルを使った遊びの開発

ゲーム：色鬼→カラフルなグローブジャングルは色鬼に最適である。子どもたちが興奮しての怪我に繋がらないよう、周りを見て走るなどの声掛けが必要である。→ルール徹底（あやふやなルールは怪我に繋がる）、様々な遊び方のバリエーションができる。

ジャングルジム探検→先頭の子どもがルートを決めて皆がついていく。  
→次は先頭になりたいと活動に期待を持つことができる。

○校外学習の留意事項

- ・簡易的な柵に注意し、寄りかからない等の注意喚起が必要である。
- ・苔が生えているところが滑りやすいため、場所を見せての注意喚起が必要である。
- ・子どもから目を離さない→複数の眼で見る
- ・救急箱を常に携帯する。

②グループ2：3歳児20名対象

課題：教室から城山公園まで歩いて行くための遠足ルートの決定

発表：ポスター（模造紙1枚マップ＋写真）と口頭発表

遠足ルート：河川敷→観覧橋→信号・横断歩道→城山公園

○マップの解説

マップ上の写真を青と黄色で囲んだもの→危険ポイント

- ・大学内の階段（転倒、落下）柵の間から下をのぞく→階段ではなくエレベーターを使用。
- ・エレベーターは、子どもが7人、7人、6人に分かれて乗る（保育者は上・下・同乗）
- ・大学北門（車や自転車が多い、塀が高く路上が見えない）→事前警告。ミラーの確認。
- ・土手の階段→手を繋いで歩く（気になる子→保育者が手を繋ぎ安心感を与える）

- 交通量が多い場所での保育者の位置取りは、付く位置と役割を明確にする。(最前列と最後尾、知らせる役目、子どもの飛び出し防止役)
- 気が散ったり友達同士でじゃれ合ったりしてしまった時の対応  
→休憩を挟み脱水症状予防の飲み物を飲む等して落ち着くようにする
- 橋は覗かない(でも魚は探したい)→子どもの状況に応じて判断する。
- 横断歩道(1、子ども達の待たせ方・2、横断のさせ方)では特に注意が必要。  
→保育者の配置(最前列と最後尾、知らせる役目、子どもの飛び出し防止役)
- 横断歩道→信号が変わるのが早い→手をあげて車に子どもの存在をアピールする。

マップ上の写真にハートを書き加えてあるもの→おすすめポイント

- 河川敷→一番植物が多い自然とふれあう機会とする。  
植物などへ子ども自身が気づきを得るよう、保育者は発見のきっかけとなる声掛けや、植物が活着していることを感じるような声掛け(天気など)を行う。

### ③グループ3：4歳児対象

課題：学校から城山公園までの植物マップの作成

発表の形式及び作成：ポスター(模造紙1枚マップ→画用紙と折り紙、絵)

口頭発表

移動についての留意点

- 教員が付く場所(エレベーターは上で送り出す役、同乗して移動する役、下で待つ役)
- 2列になって手を繋ぐ。(保育者の位置→先頭、前列、真ん中、最後尾)
- 行きは横断歩道を経験する(園での事前指導は終了している)。
- 帰りはのんびりと河川敷に降りてトンネルの下をくぐって帰る(車があまり通らない)

見られた植物（一部抜粋）

- 「シロツメクサ」＝葉は三つ葉が通常のもの（四つ葉は異変）  
→名前の由来：江戸時代にガラス製品輸入の詰め物として使用された。
- 「オオバコ」→大きな葉が目立つ、それぞれの部位→漢方薬
- 「むらさきつめくさ」→別名「アカツメクサ」
- 「ヒメジョオン」→江戸時代の輸入品の緩衝材として使用された

#### ④グループ4：4歳児対象

課題：学校から城山公園までの動物マップの作成

発表形式：ポスター（模造紙1枚マップ）マップ上の数字→動物の絵（画用紙）で補足と口頭発表

コースを辿りながら、出会った順番に紹介（一部抜粋）

- 「毛虫」→刺されないよう注意が必要
- 「蜂」→女王蜂、雄蜂、働き蜂（一般的に人が見ている蜂は働き蜂）
- 「蝶々」→鱗粉の一つ一つから模様が構成されている。コーティングされて雨に強い。
- 「てんとう虫」→太陽に向かって飛んで行くため天道虫となった（諸説ある）。肉食のもの、菌食のもの→無農薬植物栽培の生物農薬として用いられる。
- 「いもむし」→様々な虫の幼虫の姿、種類によって食べ物が違う
- 「あり」どこにでもいる。女王アリ、兵アリ、働きアリ。エサを探して一日中歩き回る。
- 「スズメ」→朝、スズメが鳴く時間は決まっている。

晴れの日：平均して日の出の17分前

曇りの日：平均して日の出の13分前

雨の日：平均して日の出の数分前

Q：スズメの重さはどれくらい？

とまと、みかん、小さいたまご、ピーマン、砂糖大匙1杯

正解：ピーマン（そうっと握るとスズメの感覚がわかる）

### ⑤グループ5：5歳児対象

課題：町にある標識や案内看板の調査

発表形式：パワーポイントと口頭発表

道路標識の種類（案内標識、警戒標識、規制標識、指示標識、補助標識）

- 駅から学校までの道路標識→車への指示（駐停車禁止、一時停止）
- はくおう幼稚園付近の道路標識

車への指示ではなく、子どもでもわかるものが増える→飛び出し  
注意など

看板の役割（宣伝や広告）

- 駅から学校まで→通学通園路、市内マップ、病院を示す看板  
→文字標識が多く、そこがどのような場所かを示す

ゲーム：線結び（上段、標識の絵と下段、意味…信号、非常口、学校や保  
育施設がある等）

ゲーム：フィールドビンゴ（見つけたら丸を付けてビンゴゲーム）

### ⑥グループ6：5歳児対象

課題：学校周辺の様々な音の収集と音マップの作成

発表形式：ポスター（模造紙1枚マップ）と口頭発表

聞こえてきた音（一部抜粋）

- 「スズメ」 掲示板前
- 「自転車」 河川敷
- 「工事」「車」「川の流れ」 橋の上
- 「スズメ」「風で木が揺れる」「ブランコの揺れる音、漕ぐ音」「猫の鳴き声」 城山公園

ゲーム：子ども向け音クイズ

クイズ：画用紙の表面に「擬音語・擬態語」をひらがな・カタカナで表示  
し、裏面は「絵」で正解を描く

ぶらんこ、鳥さん、猫→何が泣いてる？

カンカンカンカンしゅ～＝滑り台→何をして遊んでる？

誰の声かな？ゲーム＝声だけで友達を当てる

### 【Bクラス（実施日6月14日）】

#### ①グループ1：3歳児20名対象

課題：城山公園の遊具について、楽しい遊び方や集団ゲームへの活用方法

発表：ポスター（大1枚、遊具マップ・中2枚、遊具の写真と説明）と口頭発表

砂場での遊びのための留意点

→段差と砂の硬さ（保育者が掘り返し、幼児の力に合わせる）

砂場での遊び

→集団遊び、蛇おに、斜めに位置取り、縁を進んで会ったらジャンケン、棒倒し、橋渡り

アップダウンジムでの遊び

→のぼる、くぐる、さわる、ゆらす、つたうの基本動作を中心にした遊び

→色鬼、高鬼、ケイドロをもとにした動物遊び（うさぎ、さる、とり）

鬼は飼育員3人

危険箇所、公園内の様々な危険→木の根、段差、境

社会的環境への関連付け→公園での地域の人とのつながり、友達との協力、遊び方の工夫

自然環境→落ち葉などを遊びに応用する、

情報環境→動物鬼ごっこへの導入（想像力や感性を育む）

#### ②グループ2：3歳児20名対象

課題：この教室から城山公園まで歩いて行くための遠足ルートの決定

発表形式：ポスター（模造紙1枚道順ルートマップ）、パワーポイントと口頭発表

危険ポイントと、その回避または軽減方法

- T字路→左右確認
- 階段→一步一步確実に、声掛け
- 河川敷→草により雨天時は滑りやすい→アスファルト歩道

- 橋→保育者が曲がり角に立つ
- 城山公園の急階段→人に触れない（押さない）
- 城山公園内の橋→汽車のように1列で真ん中を歩く
- 立ち入り禁止看板への過度な興味への防止（保育者が立って声掛け）
- 危険回避の方法→誘導ロープの使用
- 子どもの目線から風景を見る（視界の高さの違い）

### ③グループ3：4歳児対象

課題：学校から城山公園までの植物マップの作成

発表形式：ポスター（模造紙1枚マップの絵→ポイントにめくれる仕掛け）  
と口頭発表

ポイントの植物を使った遊び方紹介（一部抜粋）

- しろつめくさ→花冠
- 傾斜遊び、階段遊び→滑る（はらばい、座って、）段ボール、グリコ  
ジャンケン
- たんぼぼ遊び→綿毛とばし、たんぼぼ笛、たんぼぼアクセサリー  
→茎を割き腕に巻く花

ゲーム：シルエットクイズ

- お散歩前にゲーム→散歩中に色を見る→答え合わせ
- 植物の名前などを調べる
- 遊びを考えることで生きた学び（想像力）になる

### ④グループ4：4歳児対象

課題：学校から城山公園までの動物マップの作成

発表形式：ポスター（模造紙1枚マップ）、パワーポイント（写真と解説）  
と口頭発表

発見した動物・・・主に虫

- つばめ→巣を探す
- ちょうちょ、みつばち、あり、バッタ
- 魚（コイ）、蜘蛛（の巣）、蛾

- あり、かぶとむし、ちょうちょ、てんとう虫、何だかわからない虫、メダカ

→雨の日はあまり見かけない→雨上がりの曇りの日はたくさんいる

### ⑤グループ5：5歳児対象

課題：町にある標識や案内看板の調査

発表形式：クイズ(画用紙で作った5種類の信号・標識カード)と口頭発表

クイズ：色当てクイズ

「車両用信号」「一時停止」「非常口」「歩行者用信号」「踏切」

答え合わせと解説：

- 「車両用信号」→「注意」を表す黄色が中央で、右が赤、左が青
- 「一時停止」→「禁止」を表す赤（赤は信号でも「禁止」の色）
- 「非常口」→「急いで」を表す緑と白（身近な場所の非常口を探そう）
- 「歩行者用信号」→雪が積もるなどしても「禁止」を表す赤が上で目立つようになっている
- 「踏切」→「注意」を表す黄色が背景で電車が黒く描かれる

考察：標識や看板の色にはそれぞれ意味がある

上の道路標識はほとんど子どもの眼に入らない

足元の点字ブロックや踏切前の白線などは興味を持ちやすい

読み札を標識等の意味にして、取り札を絵にした「かるた」が効果的

### ⑥グループ6：5歳児対象

課題：学校周辺の様々な音の収集と音マップの作成

発表形式：ポスター→保護者や地域の人へ配布するお便り

ポスター→音マップ→答え合わせ用ボード&音マグネット

パワーポイント（音と動画）と口頭発表

ゲーム（音マップ）→子どもたちの手元に配布（音探し）

マップ上のポイントへ探検に行く→地域の方々がスタンプを押してくれる

→子ども達の発見した音（事前に見つけてあった音1点、その日に子どもが発見した音3点）

- ・足音（草の上の足音、砂の上の足音）・自転車（ベル、タイヤ）
- ・川の流れ、風の音・ボール

気付き：条件（靴の種類、天気）による音の変化がある。

2時間の活動での集中力が続かない場合→途切れても心が戻る工夫を→事前のお散歩慣れが必要

## 2) プレゼンテーションの評価

授業内で行われた発表会（プレゼンテーション）では、それぞれの発表を50点満点で評価するようにした。

評価項目は、一つの項目について5段階で評価し、全10項目の合計を出すものである。評価項目は次の表の通りである。

表1：プレゼンテーションへの評価票

評価の基準		(グループ名)				
		(* 1 環境)				
発表	発表はわかりやすいか？	1	2	3	4	5
	発表の資料は丁寧に作られているか？	1	2	3	4	5
	チームワーク良く役割分担ができていますか？	1	2	3	4	5
環境への理解	中心カテゴリーについての環境理解ができており、分かりやすく説明しているか？	1	2	3	4	5
	他の環境カテゴリーとの関連が見られるか？	1	2	3	4	5
		①	*	2	環境	
	他の環境カテゴリーとの関連が見られるか？	1	2	3	4	5
		②	*	3	環境	
環境の指導法	他の環境カテゴリーとの関連が見られるか？	1	2	3	4	5
		③	*	4	環境	
	人的環境との関わりが組み込まれているか？	1	2	3	4	5
環境の指導法	ミッション遂行（保育指導計画）において対象年齢の考慮は妥当であったか？	1	2	3	4	5
	保育指導計画への工夫点が見られたか？	1	2	3	4	5
総合得点 (感想・コメント)		/ 50点				

【空欄部の解説】

- \* 1 : そのグループの中心となる環境カテゴリーを記入
- \* 2 ~ \* 4 : 中心となる環境カテゴリー以外の3つの環境カテゴリーを記入

【環境カテゴリーは4種】詳細は4-2)-②に記載

「物質的環境」「社会的環境」「自然環境」「情報環境」の4種

上の評価基準において、学生一人一人が発表を聞いて、評価した。学生からの総合得点の平均を出し、以下に筆者からの評価を述べていく。

### 【Aクラス（実施日6月13日）】

#### ①グループ1：平均39.38点（中心となる環境カテゴリー：物質的環境）

このグループは、遊具一つ一つについて丁寧に調査している。地域の公園等にある公共の遊具というのは管理者の質によって、整備の度合いがまちまちである。遊具の名称も管理者によって異なるため、様々な文献やインターネットでの情報、そういった調べ学習にかけた労力が評価に値する発表であった。また、それぞれの遊具の現在の状況がどのようになっているかを写真に撮りポスターにまとめていた。その状況によって一般的に危険と考えられる部分と、「この公園のこの遊具」だから考えられる危険とを予測し、3歳児を対象とした保育に反映させる時の注意点として考察している。危険を回避するために徹底したルールを構築しようとする姿勢は評価できるが、実際の保育ではもう少し多様な幼児の姿があることに気が付くと良い。しかしながら、新入園の3歳児対象であることを考えるとやむを得ない判断ともいうことができるだろう。

#### ②グループ2：平均38.44点（中心となる環境カテゴリー：社会的環境）

3歳児を城山公園まで散歩に連れていくという設定での調査である。3歳児の6月は幼稚園過程で考えれば入園して3ヶ月目の幼児という段階である。通常であれば、散歩に連れ出すには日々の積み重ねでの学習を要する。その子どもの姿をある程度正確にシミュレーションしていたところが、このグループの高評価点である。コースの危険ポイントを徹底的に洗い出

した調査もさることながら、「エレベーターに子ども達を何人に分乗させるか」「保育者をどこに何人配置し、どう役割分担するか」といった徹底的な保育者の動線を重視した安全確保の姿勢が素晴らしい。若干、保育者の子どもへ対する管理の姿勢が厳しいようには感じられるが、一方で、河川敷の自然を子どもたちに体感させるだけではなく、子ども達が咲いている花に気付きを得られるような声掛けの仕方を工夫し、「さっきの雨でお水を飲んで、お花が気持ち良さそうだね」と声をかけるなど、保育者の豊かな感性が感じられる声掛けを意識した姿勢が見られる。実際の保育場面でのバランス感覚が問われるだろう。

**③グループ3：平均37.26点（中心となる環境カテゴリー：自然環境—植物）**

このグループは、ポスターの作り方に工夫が見られた点が高評価である。模造紙に城山公園までのルートとなるマップを描き、マップ上に見つけた草花を置いているが、ただイラストを書き入れているのではなく、色画用紙に丁寧にスケッチしたものをマップ上に貼り付けている。写真などは一切使わず、全て手描きのスケッチ・イラストであるが、カラフルな彩が目目を引くポスターが高評価点である。出会った様々な植物の名前や、その名前の由来、植物の基本的な分布域など、しっかりと調べ学習ができていた発表であった。しかしながら、4歳児の特性や保育の現場でそれら植物との出会いをどう展開するかなど、自然環境の子ども達へのアフォーダンスの眼差しが考察、発表されていなかったのは残念である。

**④グループ4：平均36.6点（中心となる環境カテゴリー：自然環境—動物）**

動物クイズを交えながらの楽しい発表で、「私と動物との出会い」への優しい眼差しが感じられる発表であった。出会った様々な動物について丁寧に調べているが、単に文献等で得た情報だけでなく、調べながら自分たちが「そうなんだ!」と気が付いたり、「ちょっと怖い!」と思いながら納得したりしている学習の様子が目に浮かぶようで、そのように自分たちの学習過程での情動が発表を聞いているクラスメートにも共感として伝わる

部分であろう。このような、共感を持った対話の方法は、保育場面での子ども達への対応にも大いに活かされる感覚である。本人たちはあまり意識をせずに、そのような共感性の対話法を用いて発表したということは、保育者としての資質として期待できる部分である。特に、スズメの調査とそのクイズでの内容、やり取りは秀逸であった。せっかくクイズが面白いので、ただ画用紙に動物の絵を描いた物を示すだけではなく、裏返すと答えの絵が見られる仕掛けを工夫するなど、教材の作成に力を入れられると良かった。

**⑤グループ5：平均38.1点（中心となる環境カテゴリー：情報環境―標識・看板）**

このグループは、近隣の標識や看板を探すということで、学校から城山公園へのルートではなく、大学正門から大通りを通り、反対方向のはくおう幼稚園へ向かう小道までをルート設定している。そのことにより、標識や看板が地域環境の中で、「誰のために」「何を」伝えようとしているのかという意味について考察を深めることができていた。路上にある標識や看板は基本的には大人向けのもが多く、高さもかなり上に設置しているため、日常の中で子ども達が標識や看板を意識する機会はほとんどないのではないかという問題意識に行きついた考察は素晴らしい。一方、学校内(保育現場においては園内)や、保育施設の近くには「飛び出し注意」や「非常口」など、子どもの安全を確保するために大人の眼にも入り且つ低い位置に設置され子どもの眼にも入る位置におかれている看板が多くなる点についても学習されていた。標識の絵と意味を結ぶ線結びゲームや、標識・看板の絵によるフィールド・ビンゴなどは、教科書に掲載されているゲームでもあるため、教材の開発に工夫が見られると良い。

**⑥グループ6：平均40.58点（中心となる環境カテゴリー：情報環境―音）**

普段は視力に頼りがちだが、改めて「音」に耳を澄ますと、意外とたくさんさんの情報が得られるという点に気が付くことができていた。特に、小さな子どもにとって「危険を知らせる音」の情報が大事だという考察も、よ

く深められた学習であった。このグループの高評価点は、音を使ったゲームの開発である。実際に耳に聞こえる音を使用したゲームではなく、その事物を表す擬音語や擬態語をクイズにしている点は、なかなか斬新であった。ただし、オノマトペを使った言葉遊びや対話は幼児も好む傾向はあるものの、一方で、事物・事象に対するイメージを固定化させ、特に完璧主義的傾向の強い子どもなどには発想力を狭めてしまうなどのデメリットもあることを認識しておく必要があるだろう。最後のゲームは、クラスメートの声当てゲームだった。学校周辺の環境から収集した音とは離れてはくることが、保育者や友達などの人的環境も子ども達に大きくアフォードすることを考えれば、身近なクラスメートの声当てゲームなどは楽しめる保育方法となり得る。友だちの声の情報に注意を払い楽しむといったゲームは、幼児の発達段階で考えれば、より年齢の低い子どもや自己と他者の違いに気が付いたり自己主張が激しくなったりする年少児・年中児でもより大きな効果を発揮するように思う。

#### 【Bクラス（実施日6月14日）】

##### ①グループ1：平均42.31点（中心となる環境カテゴリー：物質的環境）

このグループの発表は、Aクラス6グループ、Bクラス6グループのすべての中で最も高得点を獲得したグループである。調査の内容がしっかりしていることに加え、「伝えるべき情報を絞ったポイントの捉え方」、「丁寧な発表資料の作成」、「他の環境カテゴリーとの関連付けを明確にした考察の構成力」の3点が特に突出して優れていた点である。

城山公園にあるすべての遊具について名称や危険箇所の確認などを調査しているが、その中で遊具を2つに絞り、遊び方の提案とその遊びによって得られる子どもの成長への効果を考察している。例えば、砂場の砂が固いため、事前準備として保育者がよく砂を掘り返してかき混ぜることにより、3歳の幼児の力でも遊びやすくなるといったことは、実際に自分たちがこの砂場でしっかりと遊びこんで得た情報と考察であろう。

遊び方の開発もしっかりとした幼児理解に基づいて検討されていた。例

えば、鬼ごっこの一種である「ケイドロ」を基にしたゲームの開発では、3歳児が理解しやすいように動物遊びとしてアレンジしているものなどは、やはり自分たちで動いてみないと見つけれられないルール作りである。また、ケイドロにおいては、警察と泥棒という鬼ごっこの役割がハッキリしており善悪の区別も明確である。その善悪を明確にした認識の厳しさを、動物遊びにすることによって和らげている効果もある。うさぎ、さる、とりの動物を飼育員さんが迎えに行くという役割は、「悪人が善人に捕まる」という子ども達の小さな心に疼く恐怖感を一切感じさせない演出法となる。

まとめとして、他の環境カテゴリーとの関連付けを明確に発表したのは、このグループだけである。公園での地域の人との繋がりや、同じ遊具で友だちと協力して遊びを工夫する社会性の育ちにおいて、社会的環境と物質的環境の関連を意味づけている。設置された遊具と落ち葉などの自然物、近くにいる虫などの小動物との共同した遊びの工夫によって気が付く自然環境との関わり、ごっこ遊びのルール作りの中で育まれる想像力や感性は情報環境から得られるところも多いという考察により、物質的環境（遊具）そのものが子どもにとって偉大な情報環境であると結論付けている。実践で出かける前にギブソンのアフォーダンス理論なども勉強したが、環境が子どもに働きかける意味をここまで深めた発表は秀逸であった。

## ②グループ2：平均39.15点（中心となる環境カテゴリー：社会的環境）

このグループは、分かりやすい発表の仕方を工夫しており、遠足のルートを決定するために保育者が気を付けなければならない点が非常に明確となった発表であった。同時に、保育における人的環境としての保育者が、どれだけ子どもの保育に誘導的でない影響を与えているかが明らかにされたともいえる発表であった。ポスターで遠足ルートを示したマップに留意すべき箇所をナンバリングしている。ナンバーの付いた場所は写真を撮りパワーポイントで問題点や改善策を映して解説している発表だった。また、写真の撮り方として、子どもの目の高さから写真を撮っているのが、例えば、「橋」が子どもからどう見えているのかが、実感としてつかみやすい。

大人の眼の高さからでは発見できなかった危険箇所も、子どもの眼の高さから見ると本当に恐ろしい角度で見つかった。また、それら危険箇所を通行する時の注意点や改善策を調査しているが、様々な園での実践例から必要な道具を紹介しているなど、幼児理解への確かな眼を感じ取ることができた発表であった。

③グループ3：平均40.36点（中心となる環境カテゴリー：自然環境—植物）

植物マップを作成しながら、その植物を使った遊びをたくさん考えて発表していた。また、このグループは、シルエットクイズの教材（下、写真3枚）がとても工夫して作成されていた。保育への応用の仕方なども数パターン考えながら、今すぐにも園で活用できる教材となっていた。シルエットクイズは、黒ペンで輪郭を描かれただけの草花を示して「何の花かな？」という質問が第一に成立する。更に、黒ペンで輪郭しか描かれていないため形の認識はできるが色の認識はできない。形が非常に似ているが、色がないと、区別できない花なども存在するため、クイズの答えにある程度迷うポイントがあることが楽しい。植物の名称も「？」マークをめくると答えが書いてある仕掛けがあり、更に、輪郭だけの絵もめくって窓を開けるとカラー写真による答えが表れる。「めくる」という行為は、子ども達にとって期待を高める仕掛けでもある。



写真3：答え「思川桜」

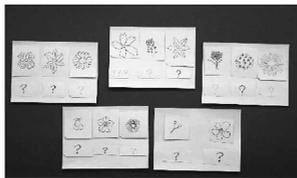


写真4：シルエットクイズ



写真5：答え「はるじおん」

④グループ4：平均39.31点（中心となる環境カテゴリー：自然環境—動物）

模造紙によるマップと、パワーポイントで分かりやすく簡潔にまとめた発表であった。

このグループは、最後のまとめのところで、天候により見つけられる動物が変わってくることへの気付きを得ることができている。実践1回目は雨で、ナメクジなどしか発見できず、困惑していた。しかし、困った経験が却って功を奏し、「よく見ないとわからないものを見つけよう」という目標に変化していった。2回目の実践日は小雨がちらついていたものの、外に出る頃には雨上がりの状態だった。雨が上がると動物が一斉に出てくる様を目の当たりにし、生物と水との密接な関係を知ることができた。パワーポイントの発表では、引きの写真で「何か動物が見えたかな？」と問いかけ、「わからない」「見えない」という反応を得てからクローズアップし、実は、「鯉」「雨の雫の付いた蜘蛛の巣」「何だかわからない生き物」などを映している。結局最後まで「何だかわからない生き物」がいたのは調査としては残念だが、保育の現場の中では、期待を繋げていく楽しみも増えるともいえる。

⑤グループ5：平均40.64点（中心となる環境カテゴリー：情報環境—標識・看板）

このグループは、Aクラスのグループ5と同じように、標識や看板は取り付け位置が高く、子どもの眼には全く入ってこないということについて指摘している。今回の調査では、そのように子どもの眼に入っていない（＝子どもが読み取る必要性の低い）標識等については調査をしていない。しかし、最後の考察場面で、足元にある点字ブロックなどはすぐに気が付き注意を向けることから、高い所にある標識でも本当に子どもに気が付いてほしい情報なら、設置位置の工夫は不可欠であるとの結論を出している。子どもが日常的に必要とする標識や案内看板の類は、一番身近なものが「信号機」である。また、幼児であっても認識しておかなければならな

いものとして「非常口」を取り上げていた。それら、子どもにとって本当に安全な生活を送るために必要なルールとなる標識等は、その形状と意味との「かるた」を作ることによって遊びに応用していた。

### ⑥グループ6：平均41.22点（中心となる環境カテゴリー：情報環境—音）

丁寧な資料作りと綿密で量的にも十分な調査、音の収集、それらを保育に導入するための手立ての考案、地域の中で保育活動を広げるための工夫など、多角的な視点で考案された「地域交流行事—音を探しに行こう」会は、素晴らしいプログラムであった。

保育者はつい日々のクラス運営やそのための保育内容について安全の確保や個の理解を優先するあまり、保育活動が保守的になりがちである。新しい行事などには億劫になり尻込みしやすいが、そのような部分が、保育施設の閉塞感を感じさせることも多い。時には、保育施設という閉鎖空間のために事故や事件が起こっていることも指摘されている。「園を地域に開き、保育活動を拓く」という意識は、これからの保育者にとって欠かせないものであるといえる。その意味で、この地域交流活動はそのねらいや交流で得られる子どもの成長への温かな眼差しを感じられる工夫が随所に見られた。まず、「園だより」の作成である。地域の方々に保育活動への協力を求める手立てとして、お便りの活用は有効である。更に、見つけてきた音をクラスの皆で共有できる大きな音分布ボードの工夫が非常に丁寧で、保育教材として素晴らしい出来上がりである。このグループも高評価を得ているが、グループのメンバー一人ひとりの丁寧な作業と、作業前に仕上がりをしっかりと想定した指導計画の立案が評価された結果であろう。

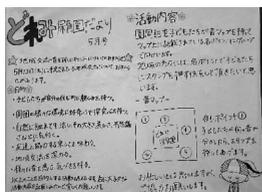


写真6：どれみ保育園だより



写真7：音分布ボード

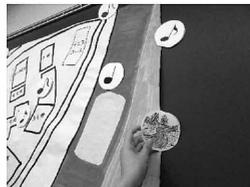


写真8：この音なんだ？

### 3) 学習の効果

学生のプレゼンテーションを見ていくと、校外への調査に出かける前と出かけた後では、「環境」への理解に変化が見られることがわかる。1回目の実践では、何となく「学生として」出ていくが、2回目には「保育者として」「子どもの目線」を意識して世界を見るようになる。目的地に行ってみてくるという作業の次に「環境」を保育の展開の中に取り入れようとする作業により、遊び方を考えたりゲームを考えたりしていく中で、学生としての視点だけでは保育が成立しないことに気が付くためだろう。

また、それぞれの環境カテゴリーが相互に関係し合っているという保育の学びの基本を体感することができてきたようだ。中心となる環境カテゴリーに目を奪われがちだった体験前に比べ、体験後にプレゼンテーションのため、自分たちの気づきを整理する作業の過程で、環境カテゴリーを区分することが困難だということに気が付いている学生の姿がある。そこで、体験が足りなかったという後悔も一部で起こるようだが、それも、次から環境を見る視点の変化として意識していくことができるだろう。

さらに、保育展開において、環境設定の在り方について考えるようになってきている。授業の中で、一般的な意味合いの「環境」「環境整備」「環境設定」を捉えた後、保育で使用される「環境」「環境整備」「環境設定」を考えていくと、非常に広範囲で保育者の仕事が必要なことに気が付く。そして、それら「環境」を保育者がどのように捉え、準備し、環境という素材を保育展開で必要な教材として発展させるか、という力が、子どもたちに大きな影響を与えていることを体感している。このように、校外へ出かけての実践の効果は、机上の勉強ではつかみ得なかった漠然とした感覚的なものを、形として表現できる力が付くということに尽きるのではないだろうか。

## 6. まとめと今後の課題

今回の実践によって、学生の学びに一定の効果はあったが、出かける前

の学生は、「何を見たら良いのか」という迷いが多く見られたのも事実である。また、プレゼンテーションの方法等も自由としたため、誰を対象に話すのか、幼児を対象としたゲーム展開の時はどうするのか？など、悩みながら作業を進めていた姿も多く見られた。

外での実践を楽しみ、そこから形にしていくという方法が難しかった部分もあることをふまえ、今後は、幼稚園教育要領・保育所保育指針等における「保育内容（環境）」での、保育における環境の概念を頭に入れてからの方が、体験の初回から「子どもの眼の高さ」を意識した世界の見方をすることができるのではないかと考える。

更に、このグループでの「環境」の体感作業により、「環境」を素材として保育教材を考える過程を学ぶことができた。個人レベルでの、保育指導計画立案の基礎的能力として、環境素材を教材化する力が理解できるようになると、3年生の夏休みに行われる保育所実習などでも力を発揮することに繋がるのではないかと思う。そこまで繋がるという見通しをもっていけるような学びの組み立て方を考案していく必要を改めて感じている。

最後に、素晴らしい学習成果を発表し、筆者の拙ない授業へ示唆を与えてくれた学生たちに心から感謝の意を表したい。

#### 【引用・参考文献】

- ・「教育基本法」平成18年12月22日法律第120号
- ・「学校教育法」昭和22年3月31日法律第26号、一部改正：平成26年6月27日法律第88号
- ・文部科学省「幼稚園教育要領」平成20年3月
- ・厚生労働省「保育所保育指針」平成20年3月
- ・文部科学省「平成18年版 文部科学白書 教育再生への取組/文化芸術立国の実現」平成19年3月
- ・日本建築学会編「こどもの環境づくり事典」2014年9月、青弓社
- ・日本建築学会編「こどもの環境づくり事典」汐見稔幸、特別寄稿：『『こどもの環境づくり事典』の刊行に寄せて』青弓社、2014年9月
- ・仙田満「子どもの成育環境と遊環構造」Civil Engineering Consultant vol.244 July 2009、建設コンサルタンツ協会、2009年7月

## 保育内容指導法「環境」の授業における実践的取り組み

- 仙田満・藤塚光政「こどもの庭 仙田満+環境デザイン研究所の園庭・園舎30」世界文化社、2016年4月
- しおみとしゆき「幼児の文字教育」大月書店、1986年6月
- 田宮緑「体験する調べる考える領域「環境」」萌文書林、2011年10月
- 柴崎正行・若槻芳浩編「最新保育講座⑨保育内容「環境」」ミネルヴァ書房、2009年11月
- 酒井幸子・守功編「保育内容「環境」あなたならどうしますか？」萌文書林、2016年5月
- 宇都宮大学教育学部付属幼稚園「豊かな暮らしを創造する幼稚園の環境～場や空間を活かして～」幼稚園研究紀要57号、2013年10月